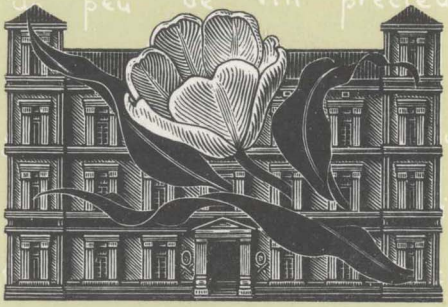
Kenichi Yoshida

J'ai, quelque jour, dans l'Océan,
(Mais je ne sais plus sous quels cieux),
Jeté, comme offrande au néant,
Tout un peu de vin précieux....



Qui [illegible] ueur?
J' [illegible] in?
Peut-ê[illegible] eur,
Songeant au sang versant le vin?

吉田健一集成

Sa transparence accoutumée
Après une rose fumée
Reprit aussi pure la mer....

4

批評Ⅳ

Perdu ce vin, ivres les ondes!....
J'ai vu bondir dans l'air amer
Les figures les plus profondes.....

新潮社

吉田健一集成

4

批評Ⅳ

新潮社

Kenichi Yoshida

吉田健一集成

4

［第6回配本］

発　行……一九九三年一二月五日

著　者……吉田健一［よしだ・けんいち］
発行者……佐藤亮一
発行所……株式会社新潮社
東京都新宿区矢来町七一
郵便番号　一六二
電話　営業部〇三－三二六六－五一一一
編集部〇三－三二六六－五四一一
振替　東京四－八〇八
印刷所……凸版印刷株式会社
製本所……加藤製本株式会社

価格はカバーに表示してあります。
乱丁・落丁本は、ご面倒ですが、小社読者係宛お送り下さい。
送料小社負担にてお取替えいたします。

© Nobuko Yoshida 1993, Printed in Japan
ISBN4-10-645604-4 C0395

吉田健一集成・4■目次

I

近代に於る純粋の観念に就て　9
ラフォルグ　15
ヴァレリイ　28
ボオドレエル　49
近代と頽廃　55

＊

ヨオロッパの人間　66
ホレス・ワルポオル　75
十八世紀の女達　85

II

読者の立場から見た今日の日本文学　97
梶井基次郎　127
河上徹太郎　137

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbook.com

中村光夫 143

Ⅲ

本が語つてくれること 153

＊

思ひ出すままに（抄） 197

Ⅳ

素朴に就て 251

控へ目に 266

無駄を省くこと 282

言ふことがあることに就て 297

何も言ふことがないこと 313

＊

象徴 329

英国の文化の流れ　332
ロンドン　341
英国の四季　344
食べものと飲みもの　358
＊
或る田舎町の魅力　364
文明に就て　368
解題　376

吉田健一集成 4

編集　清水　徹

I

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbook.com

近代に於る純粋の観念に就て

近代とはギリシヤの文化が始つて以来、その特徴と認めるべき論理的な精神を人事の全般に亙つて発揮し、素材として組織することが可能な概念の形成を思想活動の目的となし、斯くして時間の推移によつて得られる自然発生的な諸結果とは別箇に、或る段階に達して次の段階へと進む発展の形式が人間の仕事の基本的な条件であり、又それが取ることとなる一般的な形態であることを意識して、その発展を人間の活動のあらゆる部門に於て遂げて来たヨオロツパがこの終始変らない伝統の下に堆積された諸業績の多様さと、猶止むことがない発展の諸方向の間に曾ては保たれてゐた聯絡の喪失とに対処して実状に即した世界観を構想することの不可能に逢着した為に陥つた分裂と混乱の事態を指して言ふのである。そして近代の事態が斯くの如くして招致され、然も我々が今日その時代に生きてゐてその諸相を観察することが出来る以上、それは我々にとつて最も興味ある問題とならざるを得ない。何故ならそれは現実の考察であるといふ意味の他に、その性質からして極めて特殊な現実を構成してゐるからである。

近代が問題に於て豊富であるにせよ、又近代に就て語ることが複雑な問題であるにせよ、豊富であり、複雑であることが近代そのものの性格であることに我々は注意すべきである。即ち漸次的な前進を目指す発展がヨオロツパの精神的な伝統であることは既に言つたが、斯かる発展に於ては現在が未来への段階であるが如く、過去も現在への段階として理解すべきであることが認められるならば過去は結局は人間の精神がそれを対象とするに当つて現在と対等の資格を附与されるのであり、知識は未来に対するのと同様に精密な発展を過去に向つて遂げて行くこととなる。又これは地域的な面に就ても言へることなのであつて、若し人間の精神が目指す発展が如何なる場所に於ても人間の精神に何等かの形でその活動の契機を提供してゐるとすれば、斯かる活動は場所の如何に影響されることなく等しく関心の対象となり得ることが考へられる。斯くして人間の精神にとつて世界とは全世界であると同時に歴史を有する世界の全体であり、茲にヨオロツパで理解されてゐる意味での知識の性格を見ることが出来る。

事実ヨオロツパはその活動の意味に於て常に国際的であること、言ひ換へれば個別的な成果の基礎を普遍的な価値に置くことを目指して来たのであり、原理の普遍性がそれに基く行為の妥当性を主張する根拠となつてゐたのである。これは遠くはギリシヤによる地中海文化の制霸、或は又ロオマ帝国の建設、又中世紀に至つてロオマ法皇庁が標榜した世界主義にその例証を求め得ることなのであつて、これ等の歴史的な事件の特異さはその目的が他の勢力に対する自己の勢力の拡張であるよりも寧

ろ一つの世界の形成、或は或る思想に立脚した一つの世界像の完成にあつたことに存する。そしてそれにはより劣等な民族の征服も、又自己と相容れない立場にある勢力との闘争も行はれたが、如何なる場所に於ても成立すべきである真理の性質への執心はそれ等を完全に同化するに至らない場合でも、それ等によつて自己の内容を更に豊富にし、自己の論理を一層精密にする結果を齎したことを見逃すことは出来ない。即ちヨオロッパが近代の国家群をなすに至るまでの過程は国家間の軋轢が必然的に展開するといふこと以外に、一つの世界観がどの程度まで世界の現状に照して真実であるか、或はその世界観が真実である為にはそれが何処まで外部の事情による修正に堪へ、従つてそれ等の事情を許容することを要するかの探求だつたとして差し支へないのであり、斯かる観念的な作業に習熟することに於てヨオロッパは漸次に形成されたのであつて、この見地からすればヨオロッパが歴史上に遂げた発展とはその精神が共感し得る限界の拡張だつたと言へる。

斯くの如くして世界史上稀有な事態がヨオロッパに於て成立したのだつた。即ちこの一集団をなしてゐる諸国家は宗教的には幾つかの互に相容れない宗派に分れ、各々言語や伝統や習慣を異にし、然も相互間の長い年月に亙る闘争の歴史を持つてゐて現に戦争をも辞さない激しい競争をその余地がある凡ての分野に於て継続しながら、猶それ等の国々は世界に対して達した認識の或る水準に於て共同の立場にあることを自覚し、それが当時の世界文化にあつては最高の段階の表現であることを自負して、何れの国でも国そのものの上にヨオロッパの観念が置かれ、ヨオロッパは更に世界との関聯に於て考へられたのである。言ひ換へればヨオロッパ人は或る民族、乃至或る国家に属する一個人であることを意識する前に自分を人間として考へたのであり、人間が不断の発展を図る精神の所有者である限りに於て人間の進歩を信じ、又同じ人間として他の人間の如何なる表現にも興味を持つたのだつた。それは何物にも束縛されずに思索することであり、あらゆる思想を許容するのみならず如何なる思想もその名に価するものであるならば熱意を以て詮索することであり、又文化の現状に関心を示すと同時に過去に遡つて其処に見出される人間の生活の如何なる形態に就てもその再現を試みることである。斯くしてヨオロッパ人は自国語以外に数ケ国の言語を解するのが普通のことに考へられ、その文学は更に飜訳を通じて全世界のみならず、世界に曾てはあつた国々の文学の影響に接し、自国に就てもその過去を顧みる時、その国が世代から世代へと変遷して行つたその各時代の異つた有様が層をなして現実の裡にあるのが感じられるのだつた。ヴァレリイは茲に生じた事態に就て次のやうに言つてゐる。

若し細部の観察は一切省いて即座の印象と、瞬間的な認識から生ずる**総括的な概念**とにのみ問題の範囲を限るならば、其処には、――**何も**私には見えないのである。然もこの虚無の内容は極度に豊富だつたのである。

物理学者達によれば、若し我々の眼が白熱した炉の中で猶

作用することが出来るならば、其処では、――何も見えないだらうといふことである。即ち空間に存在する諸点を区別する為の光度の不平均が其処にはないのであつて、炉の中に閉ぢ込められたそれだけの恐るべきエネルギイは眼には何も見えない状態、又我々には感じることが出来ない平等を来してゐる。所で斯かる平等は極点に達した混乱に他ならないのである。

（「精神の危機」）

併しヨオロッパが遂げた発展は自然もその対象としないでは置かなかつた。そして言ふまでもなく、ヨオロッパの精神が自然に論理を求めた時に科学が創始されたのであつて、科学の発展に於てヨオロッパはその精神の論理的な性格を殊に分明にし、最も的確に発揮し、科学に於てヨオロッパは世界史の変遷から見て最も注目すべき効果を挙げたのだつた。科学は事実ヨオロッパがその名を冠し得る最大の所産なのであり、恰も芸術家が創造した人物が作者の生命を離れて生きるが如く、それは発達するに従つてその創造者たるヨオロッパの手から離れて、逆にヨオロッパとともに世界を変革し、言はばヨオロッパの第二の本質となつてヨオロッパ自体を置換するに至つたのである。即ち科学とは与へられた幾つかの条件を前提として或る目的を達するのに最も適した方法を研究することであり、研究の諸方法が確立され、将来の研究の根拠となるべき知識が量的にも人間にとつて一つの恒久的な資産の体をなすに及んで、それは可能なことを実現させるのに必ず成功する方法を用ゐる技術の綜合となり、茲に人間は結果の可否を推測する暇もなく、従来の人間の日常とは規模に於て比較を絶した諸能力の開拓と、如何なる体系の裡にも捉へる望みを持たせない、人間の経験を超越した事実の発見とに全く新しい活動の面を科学者として見出したのである。そして斯かる科学の登場が近代の混乱に如何に重要な役割を演じてゐるかは容易に察せられる。

ヨオロッパが常に何等かの意味に於て或る世界観を必要としたのは、普遍的であることを前提として発展する論理の性質からして二つの論理が同時に存在することは考へられないからであり、論理の斯かる自主性に就ては飽くまでも妥協しなかつたことがヨオロッパの精神の推論に於ての精緻さを助成したのである。そして論理が複雑になるに従つてその論理が貫いてゐると考へられる世界に対する観念も精妙さを加へ、推論の根拠の多様さが推論の方法に許容される微妙さと相俟つて如何なる事実に就てもそれが或る普遍的な秩序の下にあることが示される期待の余地を残してゐる間はヨオロッパはその広汎な活動が展開する方向にそれ等の活動とともに発展し、又それ等の活動は現に発展を継続してゐると言へる。併し今やそれは銘々に、曾てはその上に置かれてゐると仮定されてゐた秩序の支配を脱して発展してゐるのである。

科学が一つの統一された体系であるといふのはその各部門で用ゐられる方法が同一であるといふことに於てだけであつて、それが我々の知識に加へる事実に至つてはそれ等が次第に或る

実体の諸相を明かにして行くといふ底のものではなく、我々はその応用が確実な効果を収めることからそれ等が事実であることを知ることしか出来ないのである。即ち我々は科学を利用して我々の需要を満し、まだ需要ではないにしてもその満足に馴らされることで軈ては需要となる新しい欲求を作り出し、又自然を征服して世界を次第に人間が住む世界に変じることはしても、科学は我々と我々が住む世界との関係、言ひ換へれば我々が理解せんとする内面的な欲求とその欲求の対象たる諸事象との心理的な聯関に就て我々には何事も教へないのみならず、それは少くとも斯かる交渉を基礎として成立し、その交渉の性質を確定することを目的としてゐる道徳とか、思想とか、芸術とかの精神の諸活動が奏功の的確さや具体性に於て科学よりも遥かに劣つてゐることで科学の発達に従つてそれ等を無力にする作用を持つてゐる。斯くして我々にとつて科学は世界を置換し、然もその只中に我々を孤立させるのである。

併し科学の影響が近代の混乱を殆ど収拾が付かなくしてゐるとしても、科学の発達がなかつたヨオロッパを考へることは出来ない。何故なら科学が秩序立つた方法による自然の研究であるとすれば、ヨオロッパは凡ての問題にこの態度で臨んだからであり、ただその方法が自然に対して用ゐられた時、その対象が具体的な形で反応を呈する物質であるだけにヨオロッパは他の場合と比較にならない程大きな成果を挙げたのである。即ち若し論理に悖らないことを目標とする観念的な仕事の運び方を科学的と称するならば、ヨオロッパに於ては政治家も、文学者も、思想家も、その他如何なる職業に属するものもこの科学的な方法に従つて仕事をして来たのであつて、その対象が民衆であり、又言葉であり、概念であつて既にその本質に於て物質よりも遥かに多くの曖昧な要素を有するが故にそれ等の上に現れた効果がそれだけ明確さを欠くにしても、それ等に就てヨオロッパ人がなし遂げた仕事はその各々の領域に於て、それぞれが有する歴史の上で劃期的だつたことを忘れてはならない。これは文学に於ても容易に指摘することが出来ることなのであり、ヨオロッパでも最も論理的な傾向が強いギリシヤとフランスの文学を例にとつて見れば、同一の世代に行はれたエスキラスからユウリピデスへの劇の変遷と、一世紀に満たないうちに完了された浪漫派文学から象徴派の文学運動に至る詩の発展はヨオロッパ文学の発達が或る形式乃至は或る手法の追究と完成に続いて、単に新趣向といふ意味からではなく、それ等の形式や手法の検討に基いて更に改革の余地を見出すといふ形でなされたことを端的に示してゐる。そして文学の混乱とか行詰りとかは斯かる発達が全般的に遂げられた後に始めて正当に言ひ得ることなのであつて、ワイルドの次の如き言葉は、その文字通りの意味よりも其処に籠められた実感に於て我々に迫るものを持つてゐる。

科学的な遺伝の原理は外的な実際生活の領域に於てはエネルギイからその自由を奪ひ、又行動をして選択の余地がないものにしたのであるが、魂が働く主観の世界に於てはこの恐

しい影が異様な資質や、細やかな感受性や、兇暴な熱情や、冷淡な無関心の状態や、又互に唾み合ふ思想や、自己自身と格闘する激情などといふ色々な贈物を携へて現れる。即ち我々の生活は我々自身のものではなく、死者達の生活なのであり、我々の裡に宿つてゐる魂は決して我々の人格を形成し、我々の為に存在し、又我々を喜ばす為に我々のものとなつてゐる単一な実体ではないのである。それは数々の疾患に悩み、奇妙な罪の記憶を持つてゐて、我々よりも賢く、その智慧は苛烈であり、それは不可能な欲情で我々を充たし、我々に到底得られないと解つてゐるものを求めさせる。併しそれには我々が我々自身の時代を離れて他の諸時代に移り、それ等の時代の空気から追放されまいとする際に我々を助けることが出来るのであつて、それは我々自身の経験から逃れて我々よりも偉大な人々の経験を知る方法を我々に教へるのである。斯くして人生を拒否するレオパルディの苦悶が我々の苦悶となり、テオクリトスが笛を吹くと我々は女の精や羊飼ひの唇をして笑ひ、ピエェル・ヴィダルの狼の皮を着けて我々は猟犬の前を逃げ、ランセロットの甲冑に身を固めて女王の部屋から駒を進める。又アベラアルの僧帽を戴いて我々の愛の秘密を囁き、ヴィヨンの汚れた着物を着て我々の屈辱を歌と化するのである。我々はアティスとともに苦み、又あのデンマアク人の腑甲斐ない怒りや高貴な悲みも我々のものと認める。そして我々にこれ等の無数の生活を可能ならしめるのは想像力であり、想像力とは遺伝の所産であつて、要するに民族の集中された経験に過ぎないのである。

（「芸術家としての批評家」）

ワイルドは近代の混乱に処するに批評精神の確立を以てする道を想定した。併しながら批評がその対象の本質に即してその存在の根拠を究明し、斯くしてその生成の過程に参与する作業であつて見れば、ヨオロッパがヨオロッパ自体を批評の対象とする時、其処にはヨオロッパが過去に於て辿つて来た発展の経路の必然性と、斯かる発展が齎した混乱の正体とが益々明確に示されることとなるに過ぎない。そしてそれがヴァレリイがした仕事の最も重要な部分をなしてゐるのであつて、彼の著作の全部が最早何人にも補足する余地を残さない一つの精緻な近代論であると言へる。併しそれならば我々も亦彼とともに明確に絶望して猶漠然と希望を抱き続ける他はないのだらうか。ヨオロッパの絶望は言はば一生を巨大な改革と劃期的な霸業とに過した人物が晩年に至つて死を思ふ余裕以外に凡てを失つた境地に似てゐる。そしてヨオロッパが達したこの最終の状態たる近代は猶我々を回顧させ、我々自身に就て教へるものを持つてゐる。

ヨオロッパが常に人間に対して世界を考へたのは、論理が成立し得る最大の範囲として世界を世界として発展させることに人間の仕事の普遍性に対する実証を求めたからである。そして斯かる強烈に観念的な欲求が伝統となつて作用した事実に就て説明しようとする時、我々は幾何学、即ち物質を離れて全く点

と線とによつて構成されてゐると同時に現実よりも的確に実在してゐる世界の発見が如何に大規模な展開の可能性をヨオロッパに啓示したかを想像しないではゐられない。併し若し点と線とが構成する世界から得た世界の概念を実際の世界に適用して知識の獲得に資することが許されるならば、我々は遥かに確実な方法に従つて六畳の座敷と其処に我々がゐることを認識した上で、その部屋との関係に於て我々自身の存在に対する認識の仕方を把握し、この実感に基いて我々が街角に立つてゐるのを発見し、更に他の人間との交渉も同一の関係に於て成立することを体験し、思想に対しても物質の非情さと、それを克服することによつて自分のものとなすべき物質の親しさを感じ、斯くの如く我々の意識を経て我々と交渉する世界に我々を見出すことに於て我々と世界との関係を設定することも出来るのである。そしてそれは幾何学を拒否せず、寧ろ我々が世界を見る時の与件を補ふ目的の下に、且又幾何学の世界に於る我々の表現を一層自在にする為に、それが手段として益々精密になることを許容する。我々が斯く見るとはものを純粋に見ることである。

茲に河上徹太郎氏の美しい言葉がある。

……例へば赤い林檎を見て、「この林檎は赤い。」といつた場合、自然人は純粋にそれだけを意味してゐるに対し、純粋人は「その陰は紫だ。」といふ意味を必然的に含んでゐるのである。

（「自然人と純粋人」）

言ひ換へれば我々は林檎の一つにも世界を見ること、即ち世界に於るものの在り方を確認することが可能なのであり、斯かる視力に徹する時、我々は例へば牧夫座を目指して等速度で進んで行つた双児の兄弟が地上に戻つて、銘々が自分の兄弟よりも自分の方が若くなつてゐることを発見するなどといふ科学の寓話を科学の驚異と考へたりしないでゐられる。何故なら我々は天文学者の対象たる宇宙に於る時間の在り方と、年齢を有するのがその属性の一つに数へられてゐる人間の概念とを混合する不純さに気付くからである。これは要するにヨオロッパが取つた建前以外のものの見方があることを意味するのであつて、この対立は言はばヨオロッパが行為の前提となるべき理論を求めてその理論に従つて行為を決定したのとは逆に、行為の理論は行為に於てのみ求められることを認めることに存する。我々はそれがテスト氏の方法であると言ふことも出来る。併しそれならば何故テスト氏の方法が斯くまで我々には親しく感じられるのだらうか。我々の祖先の歴史は其処に無数のテスト氏が言葉による表現の領域以外に彼等の表現を確立したことを示すのであり、それを認めると否とは別として我々自身もこの態度に即することなくしては満されない意欲を持つてゐる。即ち近代に於る我々の位置に就て言へば、我が国の文化はヨオロッパの文化とともに発展してその影響の下に近代化されたのではなく、ただ我々はヨオロッパの近代文化を知ることによつて我が国の伝統を少しばかり意識するに至つただけなのである。

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbook.com